主日礼拝説教 「初めのはじまり」 予稿

日本基督教団石神井教会　2023年10月29日

【旧約聖書日課】創世記　1章1～5節、24～31節

1初めに、神は天地を創造された。2地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、
神の霊が水の面を動いていた。3神は言われた。
「光あれ。」
こうして、光があった。4神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、5
光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

24神は言われた。
「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに
産み出せ。」
そのようになった。25神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土
を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。26神は言われた。
「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、
地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」
27神は御自分にかたどって人を創造された。
神にかたどって創造された。
男と女に創造された。
28神は彼らを祝福して言われた。
「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う
生き物をすべて支配せよ。」
29神は言われた。
「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなた
たちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。30地の獣、空の鳥、地を這
うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」
そのようになった。31神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、
それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙　1章15～20節

15御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方で
す。16天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主
権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御
子によって、御子のために造られました。17御子はすべてのものよりも先におら
れ、すべてのものは御子によって支えられています。18また、御子はその体であ
る教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうし
て、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。19神は、御心のままに、
満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、20その十字架の血によっ
て平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子
によって、御自分と和解させられました。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　1章1～14節

1初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2この言は、
初めに神と共にあった。3万物は言によって成った。成ったもので、言によら
ずに成ったものは何一つなかった。4言の内に命があった。命は人間を照らす
光であった。5光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

6神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7彼は証しを
するために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によっ
て信じるようになるためである。8彼は光ではなく、光について証しをするた
めに来た。9その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。
10言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11言は、
自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12しかし、言は、自分
を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13この
人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によって
でもなく、神によって生まれたのである。

14言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を
見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

初めの言葉【こども説教のために】

「**初めに、神は天地を創造された**」。これが、「聖書」の最初に記されている言葉です。これが、神をほめたたえて讃美を歌う理由です。

わたしたちは、天地を造られたお方を「神」とお呼びして、ほめたたえます。「造られたものは、造り主をほめたたえよ」と、讃美（223 番）を歌いました。輝く太陽も、夜を照らす月も、すべて神に造られたものと共に、わたしたちは、神をほめたたえて讃美を歌うのです。

神は、「**光あれ**」とおっしゃいました。だれも、その言葉を直接聞いていないかもしれません。けれども、わたしたちは、神が「**光あれ**」とおっしゃられたことを知っています。今、この世界に「光」があるからです。「闇」だけでなく、「光」があるからです。「闇」を照らし出す「光」があるからです。たとえ「闇」の夜を過ごすときも、「光」があると信じているのです。「光」があると信じることができるからです。「わたし」という存在がここにあると信じることができるように、「光」があると信じることができるからです。

「光」は「闇」ではありません。「わたし」は、ほかの誰でもありません。神は、そのような「光」をお造りくださり、「わたし」をお造りくださったお方です。その姿を見たこともなく、その声を聞いたことがなくても、わたしたちは、「光」を造り、「わたし」を造られたお方のあることを信じてほめたたえ、讃美を歌うのです。「光」も「わたし」も、ここにあるからです。

混沌と暗闇からの「創造」

先々週、年に三度ほど招かれて共に「聖書」の学びをさせていただいている集まりに出かけてきました。「創世記」を 4 年越しで読み進めているのですが、集会の後の懇談で、案の定、イスラエル・パレスチナの問題が話題になりました。政治の問題の背景に、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という宗教の問題がどう絡んでいるのか、日本で生活しているわたしたちには、なかなか理解が難しいのです。実のところ、当事者たちにとっても、それがどう絡み合っているのか、もはや分からなくなっているのかもしれません。事態は混沌としているのです。闇に覆われている、としか言いようがありません。そして、宗教者たちの多くは、だれもこれ以上の争いを望んではいないのです。

ユダヤ教徒は、神が天地を創造された「**第七の日**」（創世記 2:1）に安息されたことを記念して、週の終わりの日である「土曜日」を「安息日」とし、礼拝に集まってきました。キリスト者は、「安息日」のユダヤ会堂に出入りすることが困難になってからは、もっぱら、主イエスがご復活されたことを記念する週の初めの日、「**第一の日**」である「日曜日」を「主の日」とし、礼拝日としてきました。イスラム教徒は、そのどちらでもなく、「**第六の日**」である「金曜日」を、共同の礼拝日としてきたのです。

わたしたちの「主の日」である「**第一の日**」は、神の創造の御業が始められた日です。主のご復活を記念する日は、神の創造の御業のはじまりを記念する日ともされてきました。

「**初めに、神は天地を創造された**」。日曜日の教会に集められて来るわたしたちは、この言葉から始めるようにと呼びかけられているのです。

それは、わたしたちの信じる神を「創造主（造り主）」として憶えるようにという呼びかけだと言ってよいでしょう。けれども、わたしたちは、そのお方が世界の初めに天地を創造されたところを見てきたわけではありません。わたしたちの先祖たちが見たわけでもありません。自然科学者の中には、そのような「創造主」によって世界が造られたという言説を荒唐無稽なおとぎ話だと言う者もあります。他方で、自然科学者であっても、神を信じる者は少なくないのです。それは、自然科学者であっても、否、自然科学者だからこそ、「言葉」を信じる者であるからでしょう。

神が天地を創造された初め、**地は混沌であって、闇が深淵の面にあ**ったと言われます。そこに、神の霊が吹きかけられます。神が息を吐きかけられたのです。言葉を発せられたからです、「**光あれ**」と。混沌と闇に包まれた世界に、「光」がもたらされたのです。「**光あれ**」と言葉が発せられたからです。その言葉によって、混沌と闇の中に「光」がもたらされたのです。

第一の者

「**初めに言があった**」という言葉で、「ヨハネ福音書」は始められています。「主イエス・キリストの福音」を物語るために、この言葉が最初に選ばれました。「**初めに言があった。言は神と共にあった**」。

わたしたちの世界を見る目は、「言葉」によって左右されています。多くの「言葉」が情報として溢れている中で、その真偽を見極めることは困難です。自分たちの国の政府は真実を語っていると信じても、他国の者は「あなたたちの国の政府は偽りを語っている」と断じます。異なる主張をする者たちが、互いの「言葉」を「フェイク・ニュースだ」、「デマだ」と断じ合っているとき、わたしたちは結局、自分が信じたい「言葉」を信じているだけなのではないか、とさえ思わずにいられません。

「聖書」は、天地創造の御業を始められた神が、言葉を発せられたと語っています。「**光あれ**」と。

それは、真偽不明の、無責任な思い込みの言葉でしょうか。いいえ、わたしたちは、自分が言葉を発するとき、その言葉に自ら責任を負うのです。偽りの言葉を発すれば、いずれ、その偽りは暴かれ、責任を取らなければなりません。「言葉」を信じる者であればあるほど、自らの発する言葉が真実であることに重い責任が伴うことを、知っているのです。詭弁を弄することで論争に長けただけの者が現実の世界を握っているとしても、それは、虚しいことです。「真実の言葉」だけが永遠に残り、「真実の言葉」に忠実な者だけが「言葉」と共にあり続けることを、わたしたちは知っているのです。

「**光あれ**」と、神は言葉を発せられました。天地創造の初めの日に、だれもその発せられた言葉を聞いていなくても、わたしたちは、その言葉が真実であることを知っています。その言葉を発せられたお方を永遠に知り続けることができます。今も「光はある」からです。

使徒パウロは、この神と共にあったお方として、御子、主イエス・キリストを信じました。このお方が「**すべてのことにおいて第一の者となられた**」と信じたのです。パウロは、主イエスを直接知りませんでしたが、弟子たちを通して、その言葉を知らされました。主イエスの言葉を知るようになったパウロは、その言葉の真実を知ったのです。その言葉を語られた主イエスを知るようになったのです。その言葉が「神の言葉」と同じように真実であることを信じて、このお方を「**第一の者**」とお呼びしました。自分も、このお方に続く「第二の者」になることを、願ったからです。

混沌と闇が支配する世界の中で、真実の言葉こそが世界を救い、神の言葉こそが人を生かすのです。「**言は、初めに神と共にあった**」。わたしたちの言葉も、神の言葉と共にあることから、新しく造り始められるのです。